

高齢者が日常生活において交流している他者との関係

— その分類と把握 —

古谷野 亘¹⁾, 澤岡 詩野²⁾, 菅原 育子³⁾, 西村 昌記⁴⁾

¹⁾ 聖学院大学, ²⁾ ダイヤ高齢社会研究財団, ³⁾ 東京大学, ⁴⁾ 東海大学

第 58 回日本老年社会学会大会
シンポジウムⅡ「いま改めて考える高齢者の社会関係 — 研究の到達点とこれから」, 2016.6.

社会関係は、これまで常に社会老年学の主要研究テーマのひとつであり、すでに多くの知見が蓄積されている。しかし、高齢者が日常的に接する家族・親族以外の他者（たとえば、立ち寄った店の店員、散歩の途中でいつも会う人、近所の顔見知りなど）との関係についてはほとんど知られていない。これらの他者は、サポートの源泉になることは少ないとされているが、高齢者の社会的孤立を防ぐうえで重要な存在である可能性がある。そこで、報告者らは概念的な整理と調査研究方法の工夫を重ね、ごく小規模な実証研究（パイロット・スタディ）を実施した。

概念的な整理から、高齢者が日常的に接する家族・親族以外の他者の中には「目的内関係の他者」「場を共有する他者」「特に親密な他者（友人）」の 3 つのタイプがあると考えられた。「目的内関係の他者」とは役割関係にある他者（たとえば職場の同僚、医師、店員など）である。このタイプの他者との関係では、交流そのものが目的ではなく、他のことを達成する必要から、その目的の範囲内で交流が生じる。「場を共有する他者」とは、文字通りその場あるいは場面を共有している他者（たとえば、公園や病院で会う人、

生涯学習のクラスで一緒の人、近所の人など）である。このタイプの他者との関係では、交流は場を共有することによって偶発的に生じる。「特に親密な他者（友人）」は、ほとんどが「目的内関係の他者」「場を共有する他者」として知り合った後、何らかの経緯を経て一定水準（「友人レベル」）の親しさを有するに至った他者である。

65～74 歳の男女各 33 人の協力を得て、3 日間にあいさつを交わした家族・親族以外の他者（合計 1,447 人）をすべて記録してもらい、分類したところ、タイプ別の割合は図の通りであった。高齢者が日常的に接する他者の中では、「目的内関係の他者」がもっとも多く、「場を共有する他者」がそれに次いだ。他方、「特に親密な他者（友人）」の割合は低く、「友人レベル」の親しさを有する他者と交流する機会は、日常的には必ずしも多くないことが示唆された。

今後は、調査研究方法の洗練と、より大規模なデータの収集・分析を行うことが必要である。

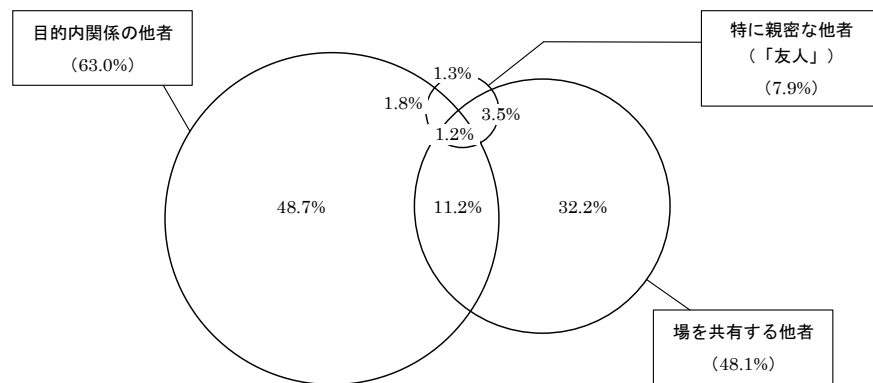


図 高齢者が日常生活において交流している他者の分類

高齢者が日常生活において 交流している他者との関係

古谷野 亘
澤岡 詩野
菅原 育子
西村 昌記

1

高齢者の社会関係に関する研究

- 社会老年学の最も古い研究テーマのひとつ

2

高齢者の社会関係に関する研究

- 社会老年学の最も古い研究テーマのひとつ
- 日本では家族に関する研究から始まった

家族形態（既婚子との同居・別居）
↓
家族と呼ばれる他者との関係（*e.g.* サポート）
↓
家族を含む他者との関係（*e.g.* サポート）

3

これまでにわかっていること

- 家族は特別な存在
➡ 安定した重要なサポートの源泉
すべての家族成員が同じ関係にあるわけではない

4

これまでにわかっていること

- 家族は特別な存在
➡ 安定した重要なサポートの源泉
すべての家族成員が同じ関係にあるわけではない
- 家族・親族以外の他者の存在
➡ 多くが学校や職場で知り合い、関係を深めてきた人
ある面では家族・親族以上の存在でありうる
交流を重ねるにつれて親しさが増す

5

これまでにわかっていること

- 家族は特別な存在
➡ 安定した重要なサポートの源泉
すべての家族成員が同じ関係にあるわけではない
- 家族・親族以外の他者の存在
➡ 多くが学校や職場で知り合い、関係を深めてきた人
ある面では家族・親族以上の存在でありうる
交流を重ねるにつれて親しさが増す
➡ 交流を重ねた人だけが残る

6

わかっていないこと

- 残らなかった人
➡ 学校でも職場でも非常に多くの人と出会っていたのに

7

わかっていないこと

- 残らなかった人
➡ 学校でも職場でも非常に多くの人と出会っていたのに
- 毎日の生活で会っている人
➡ ほとんどの人が、毎日、多くの人と会っている

8

わかっていないこと

- 残らなかった人
➡ 学校でも職場でも非常に多くの人と出会っていたのに
- 毎日の生活で会っている人
➡ ほとんどの人が、毎日、多くの人と会っている
会っているからには何らかの交流がある
 - ・ 誰と？ どんな交流？
 - ・ 交流があると何かよいこと・悪いことがあるか？

9

わかっていないこと

- 毎日の生活で会っている人
➡ ほとんどの人が、毎日、多くの人と会っている
会っているからには何らかの交流がある
 - ・ 誰と？ どんな交流？
 - ・ 交流があると何かよいこと・悪いことがあるか？
- これを明らかにしたい

10

毎日の生活で会っている人・見かける人

- 友人
- 役割関係にある人
- あいさつのみの人
- よく見かける人 → 交流がない
- 風景 → 個人として認識していない

11

日常生活において交流している親族以外の他者

- 友人
 - 役割関係にある人
 - あいさつのみの人
 - よく見かける人 → 交流がない
 - 風景 → 個人として認識していない
- } この部分を把握する

12

日常生活において交流している親族以外の他者をとらえる

- 交流の内容・頻度
- 親密さの程度
- 知りあったきっかけ
- 知りあってからの期間
- 関係の重複
- :
- :

13

日常生活において交流している親族以外の他者をとらえる

- 交流の内容・頻度
 - 親密さの程度
 - 知りあったきっかけ
 - 知りあってからの期間
 - 関係の重複
 - :
 - :
- } → 他者の分類

14

日常生活において交流している親族以外の他者をとらえる (分類の基準は?)

- 交流の内容・頻度
 - **親密さの程度**
 - 知りあったきっかけ
 - 知りあってからの期間
 - 関係の重複
 - :
 - :
- } → 他者の分類
e.g. 「友人」

15

日常生活において交流している親族以外の他者をとらえる (分類の基準は?)

- 交流の内容・頻度
 - 親密さの程度
 - **知りあったきっかけ**
 - 知りあってからの期間
 - 関係の重複
 - :
 - :
- } → 他者の分類
e.g. 「近所の人」

16

日常生活において交流している親族以外の他者の分類

- 目的内関係の他者
- 場を共有する他者
- 特に親密な他者（「友人」）

17

• 目的内関係の他者

- 役割関係にある他者
- 交流の目的は他にあって、交流は従属的
- 目的の達成のためには良好な関係を維持することが有利なので、良好な関係を作ろうとする力が働く
- 役割に基づく関係なので、基本的に代替可能
- 目的がなくなれば関係は消失する

e.g. 職場の同僚、医師・看護師、店員、など

18

● 場を共有する他者

- 特定の場所あるいは場面を共有している他者
- 交流は場の共有によって偶発的に発生する
- 良好な関係をもった方がその場を快適に過ごせるので、良好な関係を作ろうとする力は働くが、強くない
- 偶発的に発生する関係なので、代替可能
- 場の共有がなくなれば関係は消失する

e.g. 公園や病院で会う人、生涯学習のクラスで一緒の人、近所の人、など

19

● 特に親密な他者（「友人」）

- 「目的内関係の他者」「場を共有する他者」として知りあった後、何らかの経緯を経て一定水準（「友人レベル」）以上の親しさを有するに至った他者
- 基本的に、交流そのものが目的
- 属人的な関係なので代替不可能
- 目的や場の共有がなくなっても維持されやすい

e.g. 同僚だった「友人」、学校時代の「友人」、など

20

小規模なパイロットスタディ

- 調査の目的は、「高齢者が日常生活において交流している他者」を把握する方法の工夫と、大まかな実態の把握であった。
- 65～74歳の単身もしくは夫婦のみ世帯の高齢者（男女各33人）の協力を得て、3日間に「あいさつを交わした家族・親族以外の他者」をすべて記録してもらった。

21

他者の分類

- 目的内関係の他者 <現在の関係による分類>
仕事、町内会・自治会、社会活動、役所・民生委員、医師・看護師・介護職、店員、配達・訪問販売・勧誘、など
- 場を共有する他者 <現在の関係による分類>
近所、趣味・遊び、生涯学習・講座、飲食店・ジム、待合室、知らない人・初対面の人、など

22

● 特に親密な他者（「友人」）

<親密さの程度による分類>

4項目のガットマン尺度（再現性係数=.897）で3点以上の他者

「うちとけて話せる」

「信頼されている」

「共通の体験を話せる」

「心配事や悩み事を相談できる」

23

結果

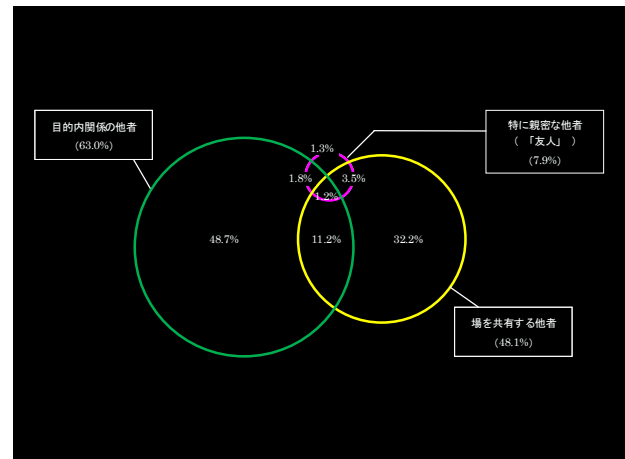
- 66人の高齢者は、3日間に1,445人の他者とあいさつを交わす以上の交流をしていた。
- 一人あたりの他者の数にはかなりの個人差と、日による差があった。

1日目	0～30	7.88 ± 6.18
2日目	0～41	6.44 ± 6.77
3日目	1～37	7.61 ± 6.54

24

- 交流があった 1,445 人の他者の 63.0% は「目的内関係の他者」、48.1% は「場を共有する他者」、7.9% は「特に親密な他者（「友人」）」であった。重複はあったが、それほど多くはなかった。

25



26

考察

- 「目的内関係の他者」「場を共有する他者」「特に親密な他者（「友人」）」という分類は、曖昧で多義的な日常用語による他者の分類を学術用語による分類に変えたという性格をもつ。
- 分類の基準を明瞭に意識しつつ、多様な他者との関係を網羅的に把握して、最終的に 3 つの類型に落とし込むというものであって、「高齢者が日常生活において交流している他者」を把握していくうえで有効なものであると考えられる。

27

- この分類は、高齢者以外にもそのまま適用できることから、若年層との比較を容易に行うようにする。
- 「高齢者が日常生活において交流している他者」を把握するための調査の方法も一応完成したと考えられる。

28

- 今後は、より大きな、できれば代表性を備えたサンプルでの検証が必要である。
- 今回の調査方法は、「高齢者が日常生活において交流している他者」を把握し、精密に記述するための方法としては有効であるが、大規模調査には適さない。大規模な調査にも適用できる方法の工夫が必要である。
- タイ (tie) 単位で集めたデータを、ケース (case) 単位の分析につなげる方法の確立が求められる。

29

高齢者が日常生活において交流している他者との関係

古谷野 亘
澤岡 詩野
菅原 育子
西村 昌記

30